

ろうべんすぎのゆらい

良弁杉由来

〔解説〕

作者未詳とも二代目豊澤團平とその妻加古千賀の作とも言われています。明治二十年

(一八八七)大阪稻荷彦六座にて初演。「壺坂観音靈驗記」とともに、明治時代に書かれた義太夫節の名作です。物語は東大寺の「良弁杉」の故事が元となっています。

〔あらすじ〕

菅原道真の臣下であった夫の死後、妻の渚の方は近江志賀の里で息子光丸を育てておりました。ところが光丸二歳の折、茶摘み見物をしていると、茶畑に驚が舞い降り光丸がさらわれてしまいます。半狂乱で諸国を尋ね歩いた母は、三十年という年月の後に正氣に戻り、東大寺の良弁僧正の生い立ちを聞いたことから東大寺を訪ねます。門前で出会った僧の知恵により、二月堂の杉に尋ね札を貼ることで、名僧となった息子と再会を果たすのでした。

〈桜の宮物狂いの段〉息子光丸を驚にさらわれ、三十年の年月でみすぼらしい姿になりながらも探し歩く渚の方。花見客や物売りで賑わう桜の宮にさしかかった時、その姿を里の子供にからかわれ、不

憫に思う大人がその訳を問いました。光丸がさらわれた時の様子を語るうちに、渚の方は狂乱状態になってしまいますが、川面に映った己の変わり果てた姿を見て正氣に戻ります。渚の方は、もはや驚に命を取られたであろう息子の菩提を弔おうと、志賀の里へ戻るために船に乗ると、乗り合わせた客の「東大寺の良弁僧正は幼い時驚にさらわれた」という話を耳にし、急いで奈良へと向かいます。

《二月堂の段》東大寺の良弁僧正は、幼い時驚にさらわれ杉の梢に置かれたところを師の僧正に助けられ、寺で大切に育てられました。しかし三十歳を過ぎた今、父母への思いは一層絶ちがたく、一目会えぬものかと日々祈っていました。毎日のお務めの帰りに立ち寄る二月堂の、杉に貼られた紙に目を留めた良弁は、そこに書き記された内容が、己の身の上と重なること驚き、近くに控えていた渚の方を呼び話を聞きます。何か証となる物はないかと問いますと、渚の方は如意輪観音の像を錦の守り袋に入れて、息子光丸の見に付けさせていたことを思い出し、良弁は幼い時から肌身離さず持っていた守り袋を取り出し、互いに親子であることを確かめます。良弁は母に長年苦勞をかけたと詫び、輿に載せ厚く労るのです。

(一般社団法人 義太夫協会発行)

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。

桜の宮物狂いの段

見渡せば大江の岸の春霞。四方の浦々寄る浪に、ちらちらと散る花の、たなびく雲とうたがはれ、鳥居も花に包まれて色香桜の宮柱、ゆるがぬ御代の花遊山ふくべの笹に千鳥足、扇をかざすざんざや。花を目当てに花を売る、娘盛りが花かんざしを、藁をつかねて青竹さして、赤いけだしの裾からげ、手笈手品もしをらしく、人を集めて立ち留り、

「サアサア召せよ花かんざしを。いと様方の顔佳花、姿すうわり撫子の末を豊かに富貴草。サアサアサ、、、召せ」

とぞ呼びにける。折もひよかひよか吹玉屋。

「しやぼん玉や吹玉や。吹けば五色の玉が出る。いと様方やぼん様へ、ちよつと手見せの千成や吹け吹けフ、、、、吹け吹け色玉や。伊勢に名高きお杉にお

玉。目玉ひよつくり玉堤灯玉小玉。エ、童宮城では不背ふはいの玉、品玉お手玉さがり玉」

「さがり玉とはなんぢやいな」

「いうてはひよつと叱られる」

「構はぬ、構はぬいうてんか」

「それは私も好もしい人気玉ではないかいな」

「サアサアサ、、、買うたり買うたり買はしやんせ。

玉屋玉屋」

と、呼び歩く。乱れてしかいもあらしのいたづらに、空心さへ現なき、夢にもそれと面影の、忘れかねたる恩愛に、焼野の雉子夜の鶴。聞くさへ鳥の恨めしく、わが故郷も志賀の里、迷ひ出たる渚の方。姿も振りも見る目さへ縫の小袖もきれぎれに、現心の乱れ髪、桜が枝に藁草履ぶらぶらと迷ひ来る。跡に大勢里の子が、

「ヤア氣違ひよ法界よ」

「氣違ひよ法界よ」

「氣違ひよ法界よ」

「氣違ひよ法界よ」

と追ひつ廻しつ来りける。

「コレコレ子供衆。アノ光丸はなんとした。なぜ誘う

ておぢやらぬぞ。伯母がよいものおまさうぞ。呼んで

おぢや。連れておぢや。サ、サ、呼んで呼んで」

と、泣き沈む。見るに不憫と里人が、寄り集まりて、

「コレコレ女中。こなたはなんでそのやうに、氣を取

逆上せて、痛はしや。心しづめてその訳を」

と、いふにこなたはむつくと起き、

「アレアレアレアレ、ソレソレソレソレ。今の羽

風はありや誰ぢや。驚ぢやエ、忌はしや情けなや。そ

の驚ゆゑにいとし子を、雲のあなたへアレアレアレ、

花咲く木々の梢さへ鳥の宿りの恨めしや。雲井の月も

モウいくつ。十三七つ七織の今度京へ上つて、守りの

ぜぜでその守り。小像如意輪觀世音。なぜいとし子の

行末を、知らぬというて済むかいな。守りといふはね

んねこの、ねんねが守りはどこへ往た。山へ鳥が連れ

て往た。跡にはなにが形見ぞや。でんでん太鼓ふり鼓、

廻れ廻れ風車。母が涙に張る乳の残してさぞや夜も昼

も、泣声空にソレソレソレソレ、アレアレアレアレ、

アレ」

と、伏し転び、あなたこなたへくるくると、くるりく

ると青柳の風に乱れて川の面。あなたこなたへ泣き

叫び、当途もなみの川上へさ迷ひ行くかげ思はずも、

わが悌の水の面、変り果てたる顔のなみ。『ふつ』と

氣のつく渚の方。

「ハアここは所もいづくぞや。ア、浅ましや浅ましや。

姿形の変るまで、さ迷ひ歩く愚かさよ。わが子は既に
荒鷲に、命を取られその時にいづくの果てに亡骸も捨
てたることさへ今さらに、思ひ廻せば幾歳をさ迷ひ暮
らす恥かしさ。せめてわが子の菩提のため志賀へ帰り
て様を変へ世にあじきなき身一つを、墨の衣に障滅の、
後世を仏に仕へん」

と、心定めて立上り、

「ナウナウ船人乗せてたべ。登りの船よ舟人よ」

と、呼べば、寄り来る登り船。

「サアサアゆき 舳へ乗り給へ」

と、取りどり乗せる引舟の、中に市人四方山の話に、
なんと奈良坂や、

「今東大寺の大僧正、良弁といふひじり聖こそ、稚い頃に
鷲といふ大きな鳥にとらはれて、成人の後広大の学者
の聞え世に高し」

と人の噂もその身には、耳を貫く親心。現心の夢さめ
て思はず聞きしほだし草。今はなにとて暫しさへ、こ
こに心も浜千鳥、飛んで行きたき心さへ身は儘ならぬ
登り船、枚方裏と見るよりも、船を頼みてつくづくと
南都さして急ぎゆく。

二月堂の段

歩み行く。

焼かずとも、草はもえなん春日野の三笠に近き木の間よりいらか重ねし二月堂。利益も深き御仏の、軒に見上ぐる葉も技も、良弁杉と名に高き。されば良弁僧正は、日ごと日ごとの御礼拝。はや先供の制止声。網代の輿のおごそかに、近習の侍、そば法師、かしづき従ひ、ゆうゆうと春日の社礼拝し、続いて御拝二月堂、思ひも高き石垣や、御拾ひなる緋の衣、錦の袈裟をかけまくも、空なつかしき杉木立、御手にかかる露涙、水晶の玉さらさらと、いと殊勝なる御祈念。御手をとどめて生ひ茂る杉の梢を眺め給ひ、

「ハ、誠や、人界の生を受け、成長なすも父母の恩、それにつけてもわが身の上。いづくの誰が胤なるか。稚なき時驚に捕らはれ、この大木の梢の空、小枝にと

どまり危ふくも、既に悪鳥の餌食にと、引裂かれなんその折から、師の僧正の御情けをうけ、命助かりあまつさへ忝くも内裏にて、御局方の助力を以て成人なせしも師の厚恩。月日も既に三十歳の、今に父母ましますか。便りも聞かず音信も、なきはこの世にましまさぬ。父母なれば未来のため、この世におはさば息災延命。なにとぞ仏陀の冥助にて、一たび逢はせたび給へと年頃日頃祈れども、そよとの風の便りさへ、涙の乾く隙もなく、鳥に反哺の孝もあり、鳩に三枝の礼もある。われは闇路の魂よばひ、生れぬ先の父母も、空なつかしさ、はかなさよ」

と、衣の袖にふりかかる露の涙の玉散りて、よその見る目も痛はしき。僧正涙押拭ひ、なに心なく木の元を見やり給べばこまごまと、文字のあいろ白紙の書き記せしに御審ましまし、

「ハテ心得ぬ。一方ならぬこの杉は石もて廻りに垣なす愛樹。誰が書き物をはり置きし。いと不審なり。とも角も書き物これへ」

と仰せの下、『はつ』と近習が差寄つて、手ばやく取つて御前に、恐れ入つて差出す。僧正御手に取らせられ、御心中にて繰返し、御不審顔に、

「いかに者ども。この書き物を張り置きしはなに者なるぞ。遠近おちいぢに、心をつけて尋ねよ」

と仰せに近習は手をつかへ

「ハ、さん候ふ。さきほどよりこのあたり、心を配り候へども人影とても候はず。ガあれに一人見苦しき、老女の非人罷りある。彼よりほかに人もなし。そもなにごとのお尋ね」

と申し上ぐれば、大僧正、

「苦しからず、その老女これへこれへ」

と宣へば、人々顔を見合はして、

『いかが』とばかり立ち兼ねるを、僧正重ねて声かけ給ひ、

「ホ、その方どもが心遣ひ道理道理。さはさりながら常日頃、今も語りしわが身の上、この書き物に露いささか、尋ね問ふべき仔細あり。心な置きそ呼び来れ」と、仰せに『はつ』と立上り、非人が前に歩み寄り、

「コリヤコリヤ非人、あれに御渡りましますは、忝くも南都一、聖武帝の御帰依僧、東大寺良弁大僧正にて渡らせ給ふ。しかるにいと浅ましきその方に、冥加至極の御言葉かかり、なにかお尋ねの仔細あり。御前へ参れ」

と権柄けんぺいに、いはれて、

『はつ』と驚く老女。かねて覚悟も今さらに、胸騒がれてとやかうと、後見らるる心にも、懐しさも先立つ

て、震ふ足元踏みしめ踏みしめ、やうやう杖に取縋り、御前間近くうづくまる。僧正御声しとやかに

「その者これへ、苦しからず、近う近う進むべし。思

ひがけなく呼出し、さぞ迷惑に思ふであらう。がその方一人、このところに居合はしくれしは幸ひなり。この書付を木の元に張り付け置きしを見留めはせぬか。いかなる人か知らざるや」

『聞かまほしや』と僧正の仰せに、はつと頭を下げ、流るる涙押し拭ひ、

「ハア、恐れながらその書付、もし御目にも留まろうかと、張り付け置きしは、浅ましい身の罪科を顧みず、この非人の婆。私でござります」

と、いふに僧正驚きて、思はず御足を進ませ給ひ、

「この書付の面には、稚なき男子を驚にとらはれ、その子の行方を長の年月、尋ねあぐみし者とやら。わが

身の上に、似通ひし御身はいづくの人なるや」

と、仰せに、老女は手をつかへ、もうし上ぐるも面伏せ、

「わらはことはその昔、官家旧臣水無瀬左近元治が妻の渚と申す者。仔細あつて勤侍きんじを辞し、夫の所領近江の国、故郷の志賀へ引移り、夫婦が中に男子を設け、悦ぶ甲斐も情けなや、夫は病にこの世を去り、忘れ形見のいとし子の、成人するを指折つて、末の栄えを樂しむうち、頃しも卯月の茶摘み時、腰元端女打ち連れて、茶摘みの手業のもし野面の遊び。時しも比叡の山嵐、どつと吹き来るはやち風、比良の方より一文字、山鷲来つてわか子を掴み、大空目がけ飛び行くを、『やらじ』と追へど、鳥は早や霞に隠れ稚な子の声もかすかに、ゆきがた行方のなき悲しみにそこはかと、人目もなんのなりふりも、後も姿も夢うつつ、子ゆゑの闇に気も乱れ、お

よそ年月三十年、御覧のとほり老いの浪、頭に白く置く霜の影に氣のつく水の面、乱れ心も納まりて、故郷へ帰る淀川の渡りの船にて噂を聞き、恐れ多くも僧正の御身の上を承り、あまりよう似た物語、伺ひもうすも女の愚痴。子の行方に、迷ひぬる身は野嵐の、案山子ともなり果て、焦れ死ぬる身を不憫と思し給はりて、身の罪科を赦してたべ。まだ夢覚めぬあだ浪の、狂女のくせと御赦しを、人々よきにお取りなし、詫びしてたべ」

とどうと伏し、人目も恥ぢず泣きみたる。始終のやうす聞し召し『さこそ』と思し僧正も、玉散る露の御涙。老女が心思ひやり、しばし言葉もなかりしが、ややあつて御目を拭ひ、

「そなたが今の物語り、親子の恩愛。さこそあらん。わが身につまされ思ひやる。さぞやわが父母上もそな

たのごとく思し召し迷ひ給はん、もつたいなや。よそにな聞きそいたましや。わが身のやうに思はれて衣の袖を絞りしぞや。シテシテその時稚な子に、後の印になるべきと、思ふ品だにあるならば聞かまほしや」
とありければ、老女涙の目を拭ひ、

「コハもつたいなき御仰せ。世にも似よりの御身とて、冥加にあまるその御言葉。譬へこのまま子の行方、分ゆくえらぬとても僧正の、情けの御意に預りし、これをこの世の思ひ出に、わが子のきづな諦めても、証拠の品もあるならば」

と、また迷ひぬる親心。

「そも淀川の渡りより、辿り辿りて参る道、印になるべき品もやと、思へど心定めなき。なにをしようどのよすがにも、乱れ心に黒髪も、枯れ野の霜と消え果て、月日の数もわきまへぬ、年月およそ三十歳の、た

だなに事も打忘れ、今まだ夢の心地ぞや。ヤヤヤ思ひにせまり胸つぶれ、ただ湧き出づる涙より、ほかに思案もエ、出でやらぬ。浅ましきよ」

と伏しまろ転び足摺りしてぞ泣きあたる。僧正はじめ、人々も、貰い涙に若草の露を増したる風情なり。老女は『はっ』と起き直り、

「げに思ひ出して候ふなり。驚に取られし稚な子の、背なしの絹の後紐、末長かれと結びさげ守りの中の尊

像は水無瀬が家に伝はりし、一寸八分の如意輪観音。これよりほかになに一つ覚えしことも御座なし」

といふに、『さては』と僧正は、としや遅しと御肌に、掛けさせ給ふかけ糸も親子の縁の深緑、錦の守り取出だし、老女が傍へ立寄り給ひ

「そなたがただ今もうされし、錦の守りはもしやそも、この品にてはあらざるか」

と差出し給へば、老女は一目見るよりも、

「ヤレヤレありがたや忝なや」

と、手を合はしたる嬉し泣き。

「そもこの錦はその昔、夫左近が主君より、拝領なせし空うつせみ蟬といふ空だきの、香の包みをそのままに、夫が物好き、みづからが手業に縫ひし守り袋。かかる印のあるからは、そんならあなたが」

「そもじが」

と、見合はす顔にはらはらはら思はず知らず僧正も、御手を取つて縋り付き、歎き給へば渚の方、人目も恥ぢず抱き付き喰ひしぼりてぞ泣き給ふ。僧正母の御手を取り、頭に戴き御背を撫で、

「ア、もつたいなや冥加なや、長の年月われゆゑに、御身を苦しめ奉り、故郷の空の御住居も、迷ひ出させ津々浦々、乞食非人となり給ひ、人の軒端や野に山に、

さまよひ給ふ。夢にだに知らぬこととはいひながら、
現在母は物貰ひ、子は僧正の聖のと人にかしづき敬は
れ、網代の輿よ緋の衣、錦の袈裟を身にまとひ、これ
が大寺の権者のと、いはれうものか浅ましや。如来の
お目に見給はば、野末の庵の瘦せ法師、軒端の非人法
師にも、劣るといふはまだなこと。鳥獸に劣りたる不
孝の罪は幾重にも御赦しあれ」

と、大僧正両手を土につけ給へば、ともにつき添ふ
人々も敬ひきやうじ矜持奉る。僧正重ねて、

「母の慈悲にてわが生国ただ今知れる上からは、江州
志賀に一字いちじうを建て、ありがたき尊像を大像如意輪觀音
の、御腹中に納め奉らん。ガ今日親子対面は、私なら
ぬ仏の導き、仏の誓ひと母の恩、重きを以て、石山寺
と号なうくべし」

と、仰せは今に近江路や誓ひあらたの御寺はこの僧正

の建立なり。母君涙押拭ひ、

「ハ、ア悦ばしや嬉しやなア。かかる尊き御身にも、
血筋の母と思し召し、かく残ましき身のさまも、御身
の穢れも思さらで、親子の名乗り下されし。情けは生
生忘るまじ。ア親なればこそ子なればこそ。かかる聖
を子に持ちし母は勝れし果報者。無事に逢ひ見る嬉し
さに、長の苦勞も忘れし思ひ」

今は心も晴れて行く、故郷の志賀へ立ち婦り、われも
姿を墨染の、草の衣になき夫の、跡懇ろに弔らはん。
御寺建立あるまではさらばさらばと立ち給へば、僧正
驚き御袖の見るもいぶせき破れ衣を、両の御手に引留
め給ひ、

「優曇華うぜんげまさりの親子の対面、しばしなりとも良弁に
孝道立てさせ給はれ」

と歎き給へば、人々も、

「存ぜぬこととて僧正の、御母君とは露知らず、無礼の段々残重にも、御赦しあつて、僧正の仰せのごとく御寺へ、ひとまず御供仕らん」

と勧めもうせば今さらに、長の年月あこがれし、わが子のほだし人々の、勧めもよそに捨て兼ねて杖を力に立ち給へば、僧正御杖手にとり給ひ、

「その御姿で御拾ひ、うしろめたくも思されん。恐れながらこの輿へ」

と、仰せに母君驚きて、

「アノ光丸殿。イヤ僧正様のホ、ホ、オホ、ホ、ホ、わつけない。いかに血筋といひながら、勿体ない、この輿へどうマア足が入れられう。ハハア許してたべ」

と辞しければ、僧正涙に母君の、顔つくづくと見給ひて、

「誠やそのかみ釈尊の、父大王の亡骸は、みづから輿をかき給ふ。今良弁も母君の、御輿をかくべき道なるに、御身の穢れを恥ぢ給ふは、皆これ良弁がなせる罪。なにとぞ御赦し蒙りて、このまま輿へ御移り」

と、人々立ち寄り、乗せ参らせ労はり、かしづき僧正は御堂を見返り伏し拝み、杉の梢も雨露うろの恩。恩と情けの親心。恵みも深き二月堂、日頃の憂きは木の元に、悦び榮ふ孝の道、頭はれ出づる弥陀の慈悲。めぐりめぐりて末の世に南都大仏乾の方、子安の神と名に高き、今にその名ぞかんばしき。